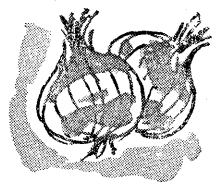


私の保育

—恵子ちゃんへの手紙—

恵子ちゃん、ことしあなたからいただいた年賀状に、「先生、人には皆ブランクの時があるのでしょうか。私は今勉強が身に入らずともユウウツです」と書かれてありましたので、元氣を出すようにとすぐお返事を出しましたがその後いかがですか。高校二年から三年へと進級なさった現在、若葉のように生氣いっぱいがんばっていらっしゃるといいのですが。

今のあなたの年齢を昔の私に当てはめてみますと、ちょうど旧制の女学校を卒業して保育の勉強を始め出したところです。目をつぶるとハイティーンの自分の姿が浮かんできます。わからないだらけの中で真剣に学ぼうとしていたようでもあり、小生意氣であつたようにも思われます。大体が幼児教育にいてもうなど大志をいだいていたわけではなく、小さい時からの子ども好きからな



宮川 せい

んとなく幼稚園の先生への道を進み、そしてそうなつてしまつたような気がします。

あなたは中学生のころから幼稚園の先生になりたいという希望を持つていらつしゃいましたが、できることならどうぞ迷わずまっすぐ進んでください。十数年前私がお世話をしたクラスの園児恵子ちゃんが、やがて幼稚園の先生になれるということとはとてもうれしいことです。幼稚園時代、スローモー（失礼）ながらじっくり物事にとり組むタイプだつたあなたは、きつと落ちついたいい先生になれると思います。幼稚園の先生は機敏でなければいけません、とかくせかせかと気ぜわしく動きまわり、子どもたちの問いかけにも、「ちょっと待つてね」「後でね」と答えることが多いようです。かつて私もあなたたちに待ちぼうけをさせたと

り、不満をうえつけたりしたのではないかと申しわけない思いがしています。

ところで恵子ちゃんも知っていらっしやるように、時の流れで私は七年前から園長の名前をかぶせられ、もうあなたたちと過ごした日々のようなたのしさはなくなっているのです。数人の園児たちが集まって遊びの相談をしているところへおそるおそる寄って行き

「交せてねー」

と呼びかけると、ちょっとふり返って

「おい〇〇ちゃん、園長先生入れてあげようか」

「入れてあげてもいいよ」

あるとき遊びの最中、はずみで私の腕がAという男の子の頭に当たったらしいのです。Aはブンブンおこつて離れて行き、「いくら園長でも子どもの頭をぶつなんてひどいよ」と担任の先生に訴えたというので、私はおどろいて「知らなかったことだけごめんなさい」とあやまった一幕がありました。子どもたちが一ばん尊敬し一ばん親しむのは担任ですから、園長の私はセカンドに甘んじてはいますが時にさびしくなることがあります。

さて二十年近く同系列の幼稚園にいた私は一体毎日何をしてき

たのでしよう。これが「私の保育」といえるものがあるかしらと改めて考えると顔がほてってきませんが、私なりの考えを書いてみましょう。

はじめに書きましたように、若い私が保育の勉強をしていたのは大戦のきざしに見えるころでしたが、倉橋惣三という立派な先生から「幼児の自発性を重んじよ。幼児の中にあるものを引き出せ」と教えこまれました。この教えが以後三十年の今日まで私の保育での憲法となっています。子どもは皆伸びる可能性を持ち驚くほど成長していきます。私たちはそこへどのように手をささのべるべきか―それが問題なのだと思います。

現在私のところの幼稚園は四クラスの小幼稚園ですが、一ばんの特徴は活気にあふれた子どもの遊び場であるということです。よく「最近の子どもたちは遊び方を知らない」とか「けんかをしない物わかりいい子がふえている」とか「足が弱くなっている」などといわれますが、私のところでは年度のはじめを除いてそんな風景は全く無く、まるで反対のことで悩んでいます。たとえばガラスが割れること、園児たちのスモックやズボンが泥んこになることなどです。

子どもたちは思う存分遊んでいる時とても生き生きしています。が、大人も快心の仕事をしている時一ばん生き生きすることを考

えますと、簡単に子どもの遊びをつぶす気にはなれません。子どもたちは遊びの中で、倉橋先生のいわれる自発性を充分發揮して、友だちとぶつかり合ったり時には悩んだりしながら知恵を増していくのだと思います。

子どもたちの遊びの質と量のコントロールは、いつも私たちが考えていることです。たとえば、朝から一時間でも二時間でも砂場に入りきりで、あきもせずダム作りをしているグループに、別なことに誘おうかどうかととまどいます。また昨夜見たテレビの実感を試そうとするのか、キックボクシングもどきにめったやたらの一騎打ちをしているのを、自発性をのばす遊びだと傍観しているわけにはいかないのです。よく考えると「幼児の遊び」ひとつが実は私にはまだよくわかっていないような気がしてきます。

現実には私はいま幼稚園全体のカジ取りの立場で、方向を誤らないようにと懸命です。そこには保育以前の問題として先生たちのパーソナリティーを考えないわけにはいきません。また現代に生きる園長としては職員の労務管理（なんと幼稚園らしくないことばでしょう）もおろそかにはできないのです。これらはすべて保育につながるからだからです。

倉橋惣三先生は『育ての心』の中で「小さき太陽」と題して大

要次のように述べておられます。

「よろこびの人は子どもらのための小さな太陽である。明るさを分ち、温かみを伝え、伸びる力を育てる。その傍に立つ子どもらの顔はよろこびに輝き幸福感に充ちている。

これに反して不平不満の人ほど子どもに近くについて有毒なものはない。とげとげしい目とあらあらしいことばによって子ども性情を傷けることになる。愚かしい不平不満はますます捨て去るように心がけなければならぬ。子どもらのために常に小さな太陽であれ」

恵子ちゃん、大へん断片的なことを書きましたが、なにかくみとってくださいましたでしょうか。要するに、この道は遙かであり、しかもよくころがる宝石のような子どもと共にあるということでしょうか。あなたがいい先生になれる日を待っています。
（東横学園野川幼稚園）